

矢倉先生の追想

矢倉先生を思う

古川博二

私が矢倉先生を知つたのは昭和3年の春4月であつた。当時私は舞子小学校に勤めていて、4年生の男女組を担任していた。或日児童をつれて海岸へ遊びに行つた。児童達は海に向つて石を投げたり、相撲をとつたりしていたが、貝殻も沢山拾つて来た。—"先生これ何貝や?"当時の私にはアサリとハマグリとの区別さえはつきりと考えられなかつた。こんな貝があるのかと初めて見る貝ばかりであつた。それで"先生これ何貝や?"には実に困つた。知らないから"先生にはわかりません"と卒直にあやまるより手はなかつた。そのうち某君が"介類館のおつさんやつたら、こんな貝みんな知つたら——"と独言のように、又聞えよがしに言つている。—"君介類館のおつさんて誰のこと?"何という迂闊であろう。如何に咄嗟のこととはいへ、この大先生を想い出せなかつたとは、全く背に汗する思いである。

さてそれではというので児童等を連れて先生のお宅へ参上來意を告げると、快くお迎え下さつた。あらかじめ類別して児童1人に1個乃至2個を持たせてあるので、1人で1つか2つの名を覚えて帰ればよい。次々と先生の前へ行つて名を教わり、忘れぬうちに学校に戻り、名を付けて棚に並べ、後小箱を作つて陳列し、これから私共の貝類研究が始つたのである。

私は度々先生のお宅へ上つた。そして貝を見せて戴き、お話を承わり、又種々の文献も紹介して下さつた。その上御馳走をいただいて帰りにはいつでも何がしかの標本を頂戴した。先生を訪れるのは私1人ではなかつた。—"加古川中学の生徒でとても熱心な人がありますよ。先日も来て熱心に研究して帰られたが、お土産に標本をあげておいた"とこの熱心な少年は後の稲葉享先生であつた。

"どんなわけか、八幡さまと貝とは深い関係がありそうです。六甲の八幡、大手の八幡と神戸でも八幡さまの社殿は陸産貝類の饒産地になつています。やはりお宮が古いからでしょうね"とおつしやつた。それで私も六甲や大手の八幡さまにはよくお参りしたものだ。神さまにお参りするのではなく、裏の森へお参りするのであつたが。

博物学会へ入れて貰つたのも矢倉先生の御紹介による。高砂で貝類の採集会のあつた昭和8年のことである。当日先生の"貝類の分布に就いて"といつたよう

な御講演を聞いたことを記憶している。稲葉さんの標本を見せて頂き、又同氏の"高砂に於ける貝類の分布"のお話をきいた。午後高砂から別府まで浜伝いに採集しクレンガイ、イセシラガイに胸をおどらせたものだつた。

神崎郡の田原附近から日光寺へかけて陸産貝類の採集会が行われ、私もお伴をして参つた。"陸貝の採集には地質図を見て、石灰岩の出る地方へさへ行けば、先ず失望することはないだろう。実は今日の採集地も貝類図を見ただけできめて来たのです。"との事であつたが、先生のお考え通り30種という大量を採集することが出来た。その晩"兵庫県博物学会では貝類の権威矢倉和三郎氏を指導者として、神崎郡日光寺へ陸産貝類の採集に行つたが、珍しい貝類を多数採集し、凱歌を挙げて引揚げた。"という意味のラジオ放送があつた。

今は神戸市に編入されているが、当時武庫郡山田村の丹生山へ、先生のお伴をして採集に行つた事がある。先生はいつでも和服をお召しになつていたが、その日も和服に下駄履きであの山を平気で登られた。"この辺を探してごらん、貝の居そうな所だから"先生がこうおつしやつた所には必ず何かがある。最悪の場合でも死なぐらひは必ず見つかる。—"先生の勤はすばらしい"と感心したものがこれは只の勤ではなく、多年の経験と科学的な洞察によつて指摘されるわけなので敬服の他はない。あれから15~16年私にはまだあのような勤は働かない。山頂でゴマカイを沢山採つた事をおぼえている。帰りに千年家というのへ案内して下さつた。何でも鎌倉時代の建物とかで、鉋が使つてなく、手斧でかきとつたような痕が柱にも鴨居にも見える。何さま古いものではある。先生は考古学にも御造詣が深かつた。

摩耶山ではビルスムシオイ、スツクシガイ、エンドウマイマイ、ベツコウの類等について教えていただいた。摩耶山へはあれから再三採集に行つたが、先生に連れられて行つた時が一ばん獲物が多かつた。私は採集に行く毎に矢倉先生を想い出す。これは嘗に摩耶山だけに限らない。先生と歩いた山野森林は申すに及ばず、何時如何なる時でも私の心の中には先生が生きていらつして種々御指導戴くような気がする。誠に有難

くも亦なつかしい。

X X X

先生は貝類の権威者であり、且つ偉大な教育者でもあつた。直接に間接に先生の薫陶を受けたものは夥しい数にのぼることを信ずる。あの温い御人格が人々を如何に導いたか、それは到底はかり知れない。

X X X

先生は趣味の豊かな方であつた。お若いときは音楽も隋分やちれたとか、高級な蓄音器と沢山のレコードを蔵しておられた。又お年を召してからは、茶の湯や書道にお凝りになつたようである。よくそんなお話を承つたものだ。先生は

ささやかに見ゆる家居もかたつぶり

ひとり住むにはことたりぬべし

という明治天皇の御製が大へんお好きのようであつた。先生の御著書「貝類雑話」にも出ているし、よく色紙などにお書きになつた様である。私もそれを一枚頂戴している。

先生は又來客者名簿をおつくりになつていて、私にも署名せよと云われ字の下手な私は大いに困つた事があつた。それにしても私如きものでも來訪者の1人として筆跡を残させようと思はれたお心は真に有難度い。

X X X

奥様も大それたよく出来たお人であつた。お家の御都合など一切かまわず奇襲的に訪問するので隋分お気にさわつた事もあつたと思うけれども、いつもにこにことしてお迎え下さつた。そして1日中家族の1員として扱つて下さつた。先生は甘藷が大へんお好きであつた。ある日、それは私が垂水校に居て高等科をもつて

いた時、学校で作つた藪を持参した事があつた。奥様も大変お喜び下さつて、直ぐ蒸籠にして逆輸入の器で私も先生と共に頂いた。その藪は御世辞にも「うまい」なんて言えるものではなかつた。私の舌がちやんとそれを知つている。それに「おいじい、おいしい」と心から喜んで下さつた。あんなくすぐつたく、しかも有難度いと思つた事はない。僅かな心持をあんなに受けて下さる先生御夫妻の「思いやり」の御心感激にたえない。奥様は今年71才頗る御元気の由、一度お訪いしたいと思つている。平素の御無音紙面をかりてお詫び致します。

X X X

大東亞戦争の日増しに激しくなつた昭和19年2月奥如先生御逝去の報を得て驚き参上した時はお葬式の済んだ後！何とも申しわけない事をしてしまつた。後日大阪の某寺にて慰靈祭が行われ、貝類学会からは黒田先生がお見えになつて切々たる弔辞をお述べになつた。私も焼香をさせて頂き先生との別れを惜しんだ。

あれから世の中がすつかり変つてしまい、戦後の混乱もやつと静まりかけた今日、博物学会が生物学会として再生して既に数年、雑誌の第2巻第2号を先生方の追悼号とすることになつて、あれを憶いこれに想うとき、矢倉先生の白髪、温容やさしいお声がなまなましく聴つて、眼底に像を描き、耳朵を打つ。

矢倉先生、多くの後輩は先生の後を慕つてひたすら従ひて行つております。貝類の研究もだんだんと盛になつて参ります。何卒安らかに眠り下さい。合掌。

貝翁矢倉甫田氏を偲んで

斎藤文雄

故矢倉甫田翁は貝類の研究にその一生を捧げられた方で、その徹底振りは、兵庫郡本山村北畑のお宅に「甲南貝類荘」の門標をあげておられたばかりでなく、端書や封書や名刺の類にも「貝類研究（創業明治四十一年）甲南貝類荘、甫田矢倉和三郎」等と書いていられたのでも明らかである。その編著の一つである、「兵庫県産貝類目録」には、発行所として「貝類研究と標本販売、甲南貝類荘」として御自身の仕事を明らかにしていられる。こうした翁と私とは学問上から知りあつたというのではなく、最初にお目にかかつたのは、昭和8年の秋であつたと思う。当時私は神戸市兵庫高等小学校に勤務していたが「兵庫県産貝類目録」を持って、見知らぬ年輩の上品な人が、理科室を訪れて來られたのが翁その人であつた。それまで翁にお逢ひしたこともないし、翁の学問的業績についてもほと

んど知つていながつたのであるが、普通の商人とは違つてゐるので、いろいろとお話して翁が民間人でありながら、貝類の研究とその知識の普及に私財を投じて専心努力され、現在も努力されつつあることを承知して、その学問に対する熱意と意力とに驚歎すると共に翁の健在を祈つたのであつたが、其後機会を得ず、

(約10年を経過した昭和16年に神戸市吉田高等小学校当時吉田国民学校)でお目にかかることになつたのである。

私は昭和14年に神戸市の研究委員として「大阪湾の生物の研究」を行い、引き続き、集めた標本の整理と、新に標本の蒐集に努めていた。何等の前ぶれもなく、翁が学校をお尋ね下さつたのである。戦争は日に日に苛烈になり、終に米英に対して宣戦を布告するようになつた年であるから、物資は統制され配給はきび

しくなつて行く一方で標本の蒐集とか製作とかは思いもよらないことになつた。幸に今まで標本瓶とか薬品とか、標本作製に必要な品の買おきが多少あつたので仕事を続けていたのであつたが、それも永くは続かない。こうした時に翁が来校されたので、校長大浦茂樹先生と相談の上、翁から標本の種類数量等については、すべて翁に一任したのである。

翁は特にこのための貝類分類表を作成し、それによつて標本を整理して、系統的に均齊のある標本になるよう、種々工夫して下さつたのである。入手した標本は、腹足類430種、堀足類5種、斧足類165種、計600種で、この外タコブネ、カキの発育順序を示す標本、カキ殻の利用を示す標本、貝殻利用の標本、人造真珠の工程を示す標本等も添えられていた。これ等の標本は一時に搬入されることなく分類表と照し合せて適当なもの20種とか30種を、わざわざ本山村の宅から学校まで持参されたので、全部搬入を終るまで半年以上を要したのであつて、如何に翁が学問的良心に徹し、誠心誠意を、わずかな標本にも傾け尽されていたかを物語るものである。

貝類の分類は一つの課題であつて、確定的のものではないから標本の整理にあつて、しばしば翁の宅をお尋ねして、御教示を仰いだのであるが、翁は常に遠慮勝ちで、その蔵書とかパンフレットとかを示してお話しがあり、よく大切な蔵書をお貸し下さつた。このために殆んど貝類について素人であつた私も、興味を持つことが出来たのである。

翁はお宅では南向の六疊の部屋に机をおいて、いつも虫眼鏡を持つて研究にいそんでいられた。参考書や標本は廊下の上に棚をつくって置いたり、木箱に入れた標本は縁の下に置かれていたりした。私のお伺いしていた頃はキセルガイの研究と、各地の海岸の砂を調べて、貝の破片や微小貝等によつて、貝の分布を知る研究であつた。これ等の研究はおそらく発表されることもなく終つたのではないかと思われ誠においしい気がする。翁は常に和服を着用しておられお好きなものは、茶と菓子、特に餡ものを最も好まれた。砂糖の配給が少くなり、菓子類は殆んど手に入らなくなつて来

たにはよほどお困りになつていたようであつた。菓子類や少しばかりの砂糖を差上げると大変なお喜びであつた。「甘いものがなくて苦しかつたのに」等といつて。

翁がなくなつてから生前宝塚動物園に貝の標本を送るよう目録をつくつて、之を先方に先に送り、標本を次々と搬入せられていたようであつたが、全部終らないうちになくなつたので、どれだけの標本が送られていないのか、何分標本のことはよくわからないから、一度来てくれないかと依頼があつたので、宝塚の方とも連絡して御伺いしたのであるが、金銭上の問題がからんでいるので、充分な御世話も出来ないでしまつた。まだ標本としては、加工されたものや真珠標本の類等も相当に残つていたようであつたから、それ等も適当に処置されるようにお話はしておいたが、どうなつたか、其の後翁のお住いのあたり一帯は戦災で、焼野ケ原と化してしまつたから、標本等は無事疎開されたかどうか 国道電車で北畑の近くを通過する度に気がかりでならなかつた。

翁の一生は特にその晩年は思うにまかせず然かも戦争のために生活が苦しかつたことと思ふが然かしそうした生活の中に在りながらやりかけたことはどこまでもやるといつた一徹、研究となれば憚むことを知らず、どこまでも出かけて行く熱意、そうした内にもユーモアもわかる翁であつた。標題ははつきり覚えていないが六甲山の蝸牛についての翁の研究の中に、小学校の唱歌の中にある、デンデンムシムシの歌にツノダセ、ヤリダセ、メダマダセとある、ツノダセ、メダマダセはわかるが、カタツムリには二種あつて解剖してみると、恋矢を有するものとそうでないものとある。これでこの歌のヤリダセがわかつたというようなことを書かれている。

翁は兵庫県博物学会の重要な一員であつたし、その研究には新発見のものも多く、学名に矢倉の名の入れられているものさえある。兵庫県が全国に否世界に誇つてよい偉大な学者であり、真に研究に徹した学徒であつたことを今また新たに思い偲ぶのである。

(昭和27年2月21日記)

父を語る

風光明媚な舞子の海岸も今日では海岸線の移動により白砂の海浜は殆んどなくなりまして、永く父の住いた舞子の家にも石崖下はもう潮が直接押しよせて来ています。明治の頃の静かな世相も移り変る世の幾星霜に今日の烈しいすがたを表わした如しに思われま

矢倉育太郎

す。当時は海浜も広く白砂青松の舞子の浜でした。海の暴れた翌朝は深海の貝や海藻が汀に打上げられましたので、早朝より之等の採集が何よりの楽しみだつたのです。父はこの頃から夢中に貝の採集を始め彼地此地の浜に蒐集の旅立ちました。明治41年に「舞子

介類館」を開設致しました。当時は身体も丈夫で若い盛りのこととて音楽をも好み小人数にて管絃楽団を組織していました。舶来の洋服を着てロンドン製の赤い模様の襟ネクタイを締めた颯爽たるモダンボーイで老後の白髪翁とは思えぬ程の勢でした。

音楽が好きのため今日では骨董品に価する赤い朝顔型の喇叭のあるコロンビアの蓄音器を愛して、舞子小学校で一夜レコードコンサートを開きました。田舎の事でもあり大勢の老若男女で場内満員の盛況を極めました。生れて始めて見る奇妙な物に子供達は拡声喇叭の中に首を突込んで中を覗くと云う今では想像もつかぬ滑稽な場面を展開し、父は得意満面に嬉しそうに笑っていました。

その頃は経済的にも多少余剰もあり、私共にもその時代には誠にハイカラな服装をさして悦に入っていた父でした。

貝の蒐集が整つてくるにつれて、各方面よりの見学あり、又舞子には有栖川宮家の御別邸がありましたので、同宮家に各宮様方が御来遊になつたその折、つれづれを父の採集した貝類を御覧賜りました事もあり、天皇陛下(当時は皇太子殿下)も生物学に御堪能であらせられるので、一度行幸にお越し下さる御予定でしたが、入口が狭く遂に御取止めになりましたので、その時の父の落胆した姿も未だに目に浮びます。その頃は父の黄金時代でしたが次第に経営困難に陥り、昭和5年遂に閉館の已むなきに至り、永年に亘り蒐

集した数5~6000種の貝類を骨身を削る思いにて学敵した時の衝撃が甚しく心身に影響を与えた結果、晩年健康秀れず阪神本山に蟹居以来、往年の気魄も喪失して、辛じて茶の湯に心を紛らわしていました。

それでも貝に対する愛着絶ち難く、又貝友絶えず來訪して共に貝を眺め貝を談り茶の湯と共に日を送るのを唯一の慰安としている間に、貝友も自ら茶を嗜むに至り、貝友は茶友と交りましたが最後迄大切に手放し得なかつた最愛の一部の種本も遂に宮内省と宝塚昆虫館へ譲渡したのを最後として、20数年に亘る貝生活に最後のピリオドを打ち昭和19年2月13日に永眠しました。

父は一生を自分の最も好む途に捧げ得た最も幸福な生涯だつたように思います。尙その上に亡きあとあと迄も学界の皆様が御心に掛けて下さる事を父も幾重かけての幸福な事かと遺族一同厚く御礼申し上げます。

去る2月13日が丁度9年目に当ります。

何卒皆様新界に御健斗されん事を切にお願い致します。

尙遺族一同お蔭様にて無事通しております。

母	婦 美	71才		健 康
長男	青太郎	49才	会社員	子供なし
次男	竜 次	44才	〃	1男1女
3男	賢 三	42才	〃	2 女
4男	貞	37才	〃	1男1女

神 戸 市 立 教 材 園

神戸電車を鈴蘭台で下車して東方2km、或は再度(フタヌビ)公園から西方1kmの所に市立教材園がある。その隣には市立の森林植物園がある。

こゝは市内、小、中、高校の理科教育の施設で生徒や教師のために実地観察、実習のために設けられた場所である。

この教材園は貴重な自然地理的な学習教材に恵まれ、園の近くには赤松を主体とした自然林の中に設けられている。園内に入ると末広の緑したたる芝生がある。この芝生が実に手入がゆき届いて何時見ても新鮮で子供や青年の緑に対する魅力をうまく捉えている。その奥が少し高まり、色とりどりの群落花壇があり花色などもよく考えられている。

当園の特徴は学校で勉強しつづつある児童、生徒、学生の心を対照として心ゆくまで考えられていることである。園内の立札の説明と書い、あらゆる植物の配置と書い、自然を取り入れた環境即ち鳥類の巣箱、魚の池等、隔から隔までゆき届いたものである。それで教

師は園内に生徒を導入すると教師の誘導などなく、自然の中で勉強出来る様に考えている。他の植物園の様に大人を対照としたものでないから説明文に説明のいる様なものでなく児童、生徒のためになる親切な方法には河原園長に頭が下る。河原園長は長らく神戸市平野小学校に勤めた人だけに児童の心に通じる他園では真似ることの出来ないすべて独創的なやりかたには大いに学ぶ所がある。

なお、当園では教材四季報を出版して、市内小、中高校の先生方のために、四季の案内が配られている。最近の夏季号を見ると、葉や花の学習、他の教科との関連などの適切な説明がある。又観察したい花や葉が一目で何所にあるか、地域的な配列などが掲げてある。この園の周辺には教師向けの園があり、高山植物や森林美の鑑賞や各種物の比較実験するのに便利である。生徒も教師も楽しく勉強出来る園で四季を通じておすすぬしたいものである。 July. 24, 1952

室 井 紳